

# 南アフリカ地方村落社会における携帯電話利用の現状

平成 22 年度入学

参加したフィールドスクール：ナミビアフィールドスクール

調査地：南アフリカ共和国

前川 護之

キーワード：携帯電話，インターネット，無線ネットワーク，出稼ぎ労働者，SNS

## 自分の研究テーマについて

21 世に入り，アフリカ大陸においても携帯電話が爆発的に普及し始めた。その急先鋒であった南アフリカでは，今やどこに行っても，携帯電話が生活において重要な役割を果たしている。

東南海岸のワイルドコースト地方の村落は，雇用機会が極めて少ないため，多くの出稼ぎ労働者を送り出している。携帯電話と SMS（ショートメッセージサービス）は，大都市にいる彼らを故郷の家族・友人と結びつける大切な役割を果たしている。一方，携帯電話関連企業は激しい競争にさらされているため，デバイス，ネットワークともに低価格化がすすみ，携帯電話は通話だけでなくインターネットとの接続が容易となった。Facebook を利用している人は多く見られ，パソコンを普段触ることのない人々でも，携帯電話による“Googling”（Google 検索）という言葉は一般的になっている。また Mxit という SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）は特に高校生の間で大人気である。中には，一日 3 時間 Mxit をしている者もいた。日本では，携帯電話の普及と共に姿を消しつつある公衆電話であるが，ここでは，高い携帯電話普及率にもかかわらず，携帯電話を用いたパブリックフォンの利用も多い。また，個人で露天パブリックフォンショップを経営するビジネスも一般的である。携帯電話に加え，わずかずつだがパソコンのインターネットも増え始めている。しかし一方，旧来の新聞・ラジオ・テレビも人々の暮らしに溶け込んでいて廃れる様子はない。



写真 - 1 携帯電話で通話する女性

このように，南アフリカの地方村落社会では，コミュニケーションの仕方，情報の取得方法が様々な方向に多様化してきている。本研究では今後さらに深く，この地域に独特なメディアの社会的状況の展開を明らかにしていきたい。

## フィールドスクールで得られた知見について

今回のフィールドスクールに参加できたことで，フィールドワーカー，アフリカ研究者になる上で大

変有意義な経験ができたと思う。そのひとつは、自分の学問分野に限らない様々な分野の専門家の方々から講義を受けることができたことである。また、講義だけでなく、人類学的インタビューや、地理学的な調査、植物や昆虫の同定、地質調査など様々な分野のフィールド調査を経験し、それぞれの方法や調査目的、注意事項等を学ぶことができた。普段同じ大学院の先生や他の学生と 10 日間朝から晩まで時間をともにすることはまずない。今回の旅で先生や同級生たちの研究についての考え方や調査地への思いを聞くことができ、アフリカ研究に関する自分の見識が広がったと思う。

一方で、ひとつ後悔されることがある。それは、事前の準備が少し足りなかったことである。今回事前に、ナミブ砂漠に住むトップナールの人々のインタビューが出来ることはわかっていたのだが、彼らについての知識が少なく、あまり有意義なインタビューが出来なかった。トップナールの集落を訪ねた後に、東京外大の永原先生の歴史に関する講義を聴いたのだが、その講義ではトップナールの集落があった地域の歴史的経緯を知ることができた。この講義を聴いてから集落に行くことができたならまた違った見方ができ、インタビューもより有意義なものとなったのではないかと思う。



写真 - 2 トップナールの集落にて。彼らはドンキーカートを利用する。

### フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか

今回訪れたナミビアはつい最近の 1990 年まで私の調査地である南アフリカの植民地であった。そのため、多くの点において南アフリカ社会との類似性が見られる。例えば、アパルトヘイトの影響である。タウンシップ、ホームランドといった有色人種居住区は南アとナミビアの共通の構造である。今回、ウイントフックのタウンシップ、カトゥトゥラを訪ねた経験はナミビアのみならず南アの特徴をも知る良い機会であった。もちろん、相違点も多くあって、決してこれらの 2 国を同様に考えることはできない。しかし、これらの国の社会、経済、歴史は今でも互いに結びつきが強く、影響しあっている。そのため、今後、南アフリカ研究をすすめる上で今回ナミビアにて学べたことは、南アフリカ社会を捉えるための良いヒントとなると考える。



写真 - 3 カトゥトゥラの様子